

平成 30 年度
常葉大学 学生自主企画
とこは未来塾 -TU can Project
活動報告書

目次

とこは未来塾 -TU can Project 概要	2
採択プロジェクト一覧	3

平成 30 年度採択プロジェクト 報告書

1. 目指せ!! 憧れのファッションモンスター ～僕・私だってオシャレしたい～	6
2. 静修活性化プロジェクト ～植物と繋ぐ地域の伝統～	8
3. 西里村まるごとエコミュージアムプロジェクト	10
4. いなさお助け隊 ～浜松市北区における絶滅に瀕する水生生物の保全～	12
5. 学生トレーナーによる高校運動部に所属する生徒へのセミナー事業	14
6. 自分でできる身体のセルフケア	16
7. 大学生による「災害支援共助システム」構築に向けての実践的活動	18
8. NPO法人との協働による浜松市北区伊平地域の活性化プロジェクト	20
9. プレス浜松×ThunderBirds 地域活性化プロジェクト	22
10. 障がい者スポーツの普及によるバリアフリー地域の構築	24
11. 都田の子どもと自然を繋げよう!!	26
12. 南海トラフ巨大地震に活かす健康サポート支援に関する調査研究	28

ポスター集

1～12. 各プロジェクトのポスター集	31
---------------------	----

『H30 年度 とこは未来塾 -TU can Project』

「とこは未来塾 -TU can Project」は、本学の専門性及び地域の特性を活かして、地域社会・地域産業の様々な課題に学生が自主的・主体的に取り組むことを支援するものです。

1. 目的

学生ならではのユニークな「視点と発想」をもち、「熱意と創意」に満ちた自主的・自発的な取組に対し、大学から教員アドバイザーによる助言や活動資金の援助などの様々な支援を行う。大学が立地する静岡県を中心とした地域社会への貢献を果たすとともに、学生の若い力を地域の活性化に結び付ける。

2. 募集分野

(1) タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

キャンパス内で様々な地域交流活動を企画し、本学が標榜する「開かれた大学づくり」への貢献を目指す取り組み。

(2) タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

静岡市・浜松市・富士市をはじめ、県内各地の地域課題の解決や地域活性化への貢献を目指す取り組み。

(3) タイプC：現代的課題解決プロジェクト

各種の研究開発や調査研究などを通して、社会的・公共的な課題解決への貢献を目指す取り組み。

3. 審査基準

- (1) 学生ならではの問題意識のもと、目的が明確に示されている。
- (2) 本学の教育理念・3 ポリシーとの関連で、意義が認められる。
- (3) 学内ないし地域の活性化もしくは課題解決が期待できる。
- (4) 多様なメンバーから組織され、適切な役割分担がなされている。
- (5) 明確な実行計画が示されており、着実な推進が期待できる。
- (6) 具体的かつ妥当な予算が計上され、執行計画が示されている。
- (7) 成果の見通しならびに成果還元の方法が具体的である。

4. 助成金額

1 プロジェクトあたり 15 万円を限度とする。

H30年度 ところは未来塾 -TU can Project 採択プロジェクト一覧

平成30年度は、以下の12件のプロジェクトが採択されました。

No	タイプ ※	テーマ	グループ名・ゼミ名
1	B	目指せ!! 憧れのファッションモンスター ～僕・私だってオシャレしたい～	赤塚ゼミ
2	B	静修活性化プロジェクト ～植物と繋ぐ地域の伝統～	浅見ゼミ
3	B	西里村まるごとエコミュージアムプロジェクト	小杉山ゼミ
4	B	いなさお助け隊 ～浜松市北区における絶滅に瀕する水生生物の保全～	山田ゼミ
5	A	学生トレーナーによる高校運動部に所属する生徒への セミナー事業	トレーナーサークルCATS
6	A	自分でできる身体のセルフケア	SinQ
7	B	大学生による「災害支援共助システム」構築に向けての実践的活動	3.11はままつ東北復光プロジェクト
8	B	NPO法人との協働による浜松市北区伊平地域の 活性化プロジェクト	地域貢献サークル Cocoa
9	B	ブレス浜松×ThunderBirds 地域活性化プロジェクト	ThunderBirds(スポーツ ボランティアグループ)
10	B	障がい者スポーツの普及によるバリアフリー地域の構築	障☆スポSC
11	B	都田の子どもと自然を繋げよう!!	中村ゼミ
12	C	南海トラフ巨大地震に活かす健康サポート支援に関する調査研究	ThunderBirds(災害支援 グループ)

- ※(1) タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト
 (2) タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト
 (3) タイプC：現代的課題解決プロジェクト

とこは未来塾 -TU can Project

平成 30 年度採択プロジェクト 報告書

目指せ！！憧れのファッションモンスター ～僕・私だってオシャレしたい～

所属：保育学部 赤塚めぐみゼミ 3年

保育学部 小川亜矢加（代表）、下山夏生、尾崎萌、川崎安寿佳、杉田美夏、須原咲季

1. はじめに

企画の発端は、本ゼミ学生が、アルバイト先の障害児支援施設で「タキシードを着たい！」と繰り返し訴える17歳の男子児童に出会ったことである。これまでゼミ活動で訪問した障害者施設でも着脱しやすいスウェット素材の洋服や、車椅子の利用を考慮したズボンの着用など利便性を重視した衣服が多かった。障害があってもオシャレをしたいと感じている人が他にもいるのではないかと、また、オシャレを通じて障害者の地域参加が促進できるのではないかと考え、本プロジェクトを立ち上げた。

2. 事業内容

2-1. 検討1：障害児（者）の衣服に関するニーズ調査

① 目的：障害児（者）の衣服に関するニーズを明らかにすることを目的とした。
② 方法：静岡市の県立特別支援学校、障害児（者）支援施設の計4カ所に在籍する方のうち、本企画への参加に同意が得られた124名を対象とした。対象者124名のうち、当事者は30名で、支援者（教員を含む）は94名であった。調査は質問紙により実施したが、知的障害のある対象者においては設問の読み取り等への困難に配慮し、インタビューにより実施した。

③ 結果・考察：図1より、着脱衣に関する困り感は、支援者・当事者ともに高かった。一方、困り感が「ない」と回答した人は、当事者では0%であったのに対し、支援者では32%であった。これより、当事者の衣服に対するニーズは、支援者でさえ十分な把握が難しいと考えられる。

当事者の具体的なニーズとしては、肢体不自由のため「自分でボタンが留められない」「ズボンが履きにくい」など、多様であった。

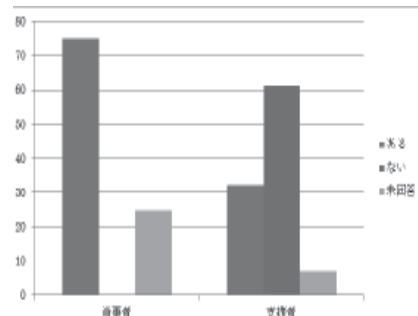


図1 着脱衣に関する困り感の有無

2-2. 検討2：オシャレをきっかけとした障害児の地域参加に関する支援

① 目的：障害児の「オシャレ」に関する支援が、彼らの社会参加にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。
② 方法：対象は、検討1のアンケート調査で、「衣服の着脱困難度」と「既制服における制約度」に関する設問において、チェックされた項目数の多かった事例のうち、本企画への参加を希望した事例2名（肢体不自由児）とした。事例Aは小学5年生男児で、発語はなく、日常的な衣服の着脱は全介助であった。事例Bは小学6年生男児で、単語およびサイン

でコミュニケーションが可能であり、日常的な衣服の着脱は全介助であった。手続きは、草薙商店街で行われる「うどハロウィン」への参加に向けて、着てみたい衣装を対象児および保護者から聴取し、学生が着やすさとオシャレを考慮し、衣装を製作した。その際、障害者や高齢者を対象とした加工衣服等の製作・販売を行う「株式会社 WFB cloth tone」の方々に指導・助言を依頼した。一方、学生は、障害者でも参加しやすいイベントの実現に向けて、「うどハロウィン」の実行委員会のメンバーとしても参画した。

③ 結果と考察：衣装製作に向けた対象児との打合せでは、普段着る機会のない特別な衣装に喜びを示し、周囲の人に羽織った衣装を見せて回るなどの様子が見られた。「うどハロウィン」においては、車いす利用者でも参加可能なルートを準備していただくなど、障害に配慮したイベントの実施につながった。対象児の保護者からは、今回の企画を通じて「子どもがいろんな友達と触れ合えたことを嬉しく思っている。」「今まで自閉症と診断されてからは見た目が普通で周りには（障害特性を）理解されないだろうと、息子の苦手なことは避けて生活してきた。でも親がいなければ頑張れると知ったので、これからは甘やかさず少しずつ親から離れて苦手なことにチャレンジさせていこうと思う。」とのコメントが寄せられ、オシャレを通じた企画が、対象児や保護者自身の喜びにとどまらず、地域活動への参加を促進したことがうかがえた。

2-3. 検討3：障害児（者）のオシャレ促進に向けた合理的配慮の実践例

① 目的：障害によって着脱衣に制限のある人を対象とした合理的配慮の提案を目指したリメイク術の検討を目的とした。

② 方法：検討1のアンケート結果を基に、障害のニーズに応じた既制服のリメイク方法について、実践を通して検討した。

③ 結果と考察：重度の身体障害により、寝たままでも着脱が可能なズボンの提案として、図2のオレンジ枠にファスナーを取り付け1枚に展開できるようにした。リメイク方法が比較的簡単で、安価な材料で作成することを心掛けた。これらの実践例をブログに掲載して障害を持つ子どもの保護者や支援者が閲覧できるようにした。家庭でのリメイクが可能になれば、機能性だけを重視して衣服を選択するのではなく、デザインや好みの色などを重視した選択も可能になると考えられる。



図2 リメイク案イメージ図

3. 総合考察

本企画を進めていく中で、障害者の衣服に対するニーズが数多く存在することが分かった。また、平成30年12月25日の静岡新聞に「病気の子に『おしゃれ』を」というタイトルの記事が掲載されていた。ここでは、医療ケアが必要な子どもにとっては「かわいい・かっこいい」が当たり前でないことや、おしゃれが子どもや家族にとって生活の励みになることなどが述べられていた。本企画を通じて、おしゃれは障害者の社会参加を促進する要因になり得ることが分かった。今後は、今回立ち上げたブログを多くの方に届くよう広めていく予定である。

静修活性化プロジェクト～植物と繋ぐ地域の伝統～

所属：浅見ゼミ

社会環境学部 森川佳祐(代表) 水谷真菜 大庭峻輔 大川佑真 高田武瑠 石川稜
増田敦人 菊地賢記 勝海貴裕

1. 目的・概要

活動場所は静岡県浜松市天竜区春野町である。地域では、かつての呼び名で「静修」と呼ばれている。この場所は、人口が約 30 人で高齢者が約 80%を超えている。このような限界集落における伝統は時間の流れとともに絶えていく。こうした伝統を絶えさせてしまうのではなく、地域との交流を主として活動を行い、地域に残る伝統を引き継いでいくことが必要である。

我々はかつての生活の中で大きな役割を果たしていた植物に着目した。植物を使った遊びや、料理、薬など地域に伝わる植物の伝統的知識は多く存在するが、身近な植物が減ってしまった現代の生活の中では植物を利用することは減っている。こうした中で、植物の伝統的知識を知り次の世代につなげ植物の伝統的知識を守っていくことを目的とする。



現地調査の様子

2. 活動内容・方法

地域との連携：本活動では、主に「静修クラブ」の運営を行っている大脇睦彦さんにご協力をいた。具体的には、現地調査の際の同行、地域住民との橋渡し、会場の準備などの協力をしていただいた。また、植物については羽入富代さんにご協力をいただき、伝統・文化の主な情報源として様々な話を伺った。さらに、交流会・試食会の際には地域の老人会の方全員にお越しいただき活動に参加していただいた。

① 地域に伝わる植物にまつわる伝統的知識を調べる

地域にある植物にまつわる伝統的知識は一部の人しか知らない。個人個人でしか情報を把握していないという環境で、このままでは伝統的知識は途絶えてしまうと考えられる。現地調査では、大脇睦彦さん、羽入富代さんにご協力をいただき、植物を使った遊びや薬、実際に食べている植物についての情報をいただいた。

② 交流会・試食会の実施

地域の伝統的知識を伝えるといえども、地域の人達は興味を持ってくれないというケースも考えられる。本活動ではただ伝えるというのではなく実際に体験してもらうことで、伝

えるというだけでなく思い出すということも目的に交流会・試食会を行った。交流会・試食会の内容は以下の通りである。

＜薬＞地域で植物を利用して作られた薬を用意し、実際に触れていただいた。

＜遊び＞地域で遊べる植物として伝わっているものを地域で採取し、実際に遊んでいただき地域の人に思い出を話して

もらいそれをもとに新たな情報の収集を行った。

＜料理＞地域で食べられるとされている植物を料理し、実際に食べていただいた。また地域では食べられていない植物も食べられるということを知ってもらうため、学生が考えた料理を食べていただいた。



交流会・試食会の風景

③ 映像の放映・パンフレットの配布による継続的な活動

本活動では、静修クラブで運営する「トンネル café」にて調査した内容を放映することで内外部の人に、より伝統の理解を深めてもらうことを目的とした。また、パンフレットを用意することで手に取ってもらい持ち帰ってもらうことで情報の拡散を促す。

3. 活動成果

- ・我々は交流会・試食会において伝統知識を提示し、再確認していただき伝統知識であることを認識していただくきっかけの場を提供した。
- ・静修クラブを利用していただいた方に、植物の伝統的知識を知っていただくための春野町紹介映像の作成、春野町で取れた植物を使って我々が作成した遊びや料理、薬などを紹介するパンフレットの作成を行い、活動を継続的に行うことで伝統的知識の発信を行った。
- ・引き継ぎに必要な情報として GIS（地理情報システム）を利用した植物の分布を地図化、植物一覧表を作成した。



抹茶山椒ケーキ

4. 今後の展開

静修クラブでの情報の発信を継続していただき、伝統的知識の継承を行う。

また、一年間での活動では伝統的知識を広めていくことには限界があり、継続した活動が望まれる。

そのため、本活動での内容を次のプロジェクトに繋げることを可能とするため、更なる情報の整理、静修クラブとの継続した連絡を行うことで引き継ぐための環境を整える。

西里村まるごとエコミュージアムプロジェクト

所属：小杉山 晃一ゼミ

社会環境学部 小松 千紗（代表）、竹内 友美、望月 琴乃、平野 翔大
小川 龍太郎、上田 陽、吉澤 佑梨、前林 諒哉
渡邊 稜人、鈴木 萌生、米山 輝

1. 目的・概要

清水区西里地区は、旧清水市の森林公園として多くの市民に親しまれてきた。小杉山ゼミでは、これまで西里地区で蓄積してきた環境調査や住民との共同作業の成果を集約し、地域全体を「ヒトと自然とが共生する」エコミュージアムとすることを考えた。来訪者が散策しながら、あらゆる場所で野生生物の生態や自然の仕組み、あるいは自然を生かした農林業を学ぶための宿泊型博物館などを計画し、設置することやイベントを行うことが今年度の目的である。

2. 事業内容・方法

① 西里ビオトープリノベーションプロジェクト

ビオトープ（生き物が棲む空間）の改善作業を地域住民や市民と協働して実施した。今年度はカエル類の生息環境に着目し、繁茂しすぎた水草の除草、浅い止水の水辺の創出、ホダ木積み等を行った。

② 常葉大学教育学部附属橘小学校と連携した親子自然体験教室

西里地区内のビオトープや地区内を流れる興津川を主なフィールドとして、常葉大学教育学部附属橘小学校の1年生から6年生までの児童を対象に、学生が考案した自然体験教室を実施した。

③ ハンター入門講座

野生動物による農作物の被害を減少させるため、狩猟免許試験の対策になるハンター入門講座を開催した。本講座は「大学生の大学生による大学生のための」講座で、狩猟免許取得を目指す人から狩猟に興味がある人までを対象としたものである。（大学生でなくても参加可能である。）

④ 古民家を利用した宿泊型博物館

生物多様性（生態系サービス）を守っていくために重要なのは、生物多様性の大切さを多くの人に知ってもらうことであると考え、地区内にある古民家「安来里」に博物展示を実施し、宿泊型博物館とすることで、情報発信の拠点とした。

⑤ 西里村の新たな特産品の提案

「日本の主要農産物」で「原産地が日本を中心とした東アジアの物」、「野生生物と関係のある物」の中から、西里村に適応した農産物を生産し特産品となる物を提案することで、農山村の農業を維持していく仕組みを考えた。

3. 事業成果



① 西里ビオトープリノベーションプロジェクト

イベント参加者と協働し、冬季でも湛水する湿地の造成やカエル類が越冬に利用できるエコスタックの造成、繁茂しすぎた抽水植物の除草を行ったことで、新たな環境を創出でき、環境改善も行うことができた。今年度の参加者は 19 名であった。

② 常葉大学教育学部附属橘小学校と連携した親子自然体験教室

イベント後に行ったアンケートの結果、本イベントを通して子供たちの生き物に対する意識や自然に対する関心をより高めることができたことが分かった。今年度の参加者は 22 名であった。



③ ハンター入門講座

本イベントを通して狩猟を身近に感じてもらい、狩猟に興味を持ってもらう足掛かりとすることができた。また、現役の猟師の方にお話を聞くことやジビエのランチ、鹿革のクラフト体験も行った。今年度の参加者は 16 名であった。

④ 古民家を利用した宿泊型博物館

「人と自然との共生」をテーマに、西里の自然、農業、暮らしにまつわる展示を行い、古民家を博物館化した。展示物の解説パネルや模型は実際に製作し、元々古民家にあった古い農機具や古道具なども展示物に組み込んだ。



⑤ 西里村の新たな特産品の提案

今回 3 つの条件から作物を選出した結果、柿と大豆と葱が西里村の新たな特産品として適していることが分かった。また、この 3 種類は環境教育に利用すると効果的であるといえるため、特産品とするだけでなく環境教育での利用も期待できることから、農業とリンクさせた環境教育プログラムも考案した。

4. 今後の展開

今後、更に発展させていくためには、地区内の環境や施設をサテライトとしてエコミュージアムにさらに組み込んでいくことが必要である。なので、今後も西里地区を発展させていくためにも来年度のゼミ生に引き継ぎ、取り組みを継続していくことでエコミュージアムの完成を目指していきたい。

いなさお助け隊

—浜松市北区における絶滅に瀕する水生生物の保全—

所属：社会環境学部 旧山田辰美ゼミ

社会環境学部 平野 翔大（代表）、上田 陽、望月 咲見、大石 真也、上村 真凜、塩川 純也、
高遠 翔真、ビオトープ研究会有志

1. 背景

浜松市北区は、棚田・ため池・雑木林等の豊かな自然環境を有し、絶滅が危惧されるタガメやゲンゴロウ類を筆頭とした水生生物の宝庫であった。ところが、近年は人口減少・高齢化による農業への依存、耕作放棄地の増加、外来生物の侵入などの原因から、多くの種が危機的な状況にある。長年に渡る山田辰美ゼミの研究から、水生生物にとって県内トップクラスの重要生息地である引佐地区の大部分が危機的な状況に瀕しており、一刻も早い保全対策や環境改善が望まれる。

私たち「いなさお助け隊」はビオトープの実践活動を通して、自然環境に対する認識を深め、自然再生の志を高めた学生が、自らの学びと地域貢献を目的に集まった組織である。地元住民の要請を受け、緊急性のある生物の保全活動を実践した。

2. 研究内容と成果

(1) 生物調査

水生生物の捕獲調査から、種の多様性、自然環境の経年的な変化を把握している。引佐地区の 9 地点で生物調査を行った結果を表 1 に示す。

表 1. 2018 年度に浜松市北区引佐地区において確認された主要な水生生物

分類	種名	静岡県レッドリスト(2017)	調査地点									生息を確認した地点数
			st.1	st.2	st.3	st.4	st.5	st.6	st.7	st.8	st.9	
水生昆虫	タガメ	要注目種（部会注目種）	○	○								2 地点
	タイコウチ	—	○	○		○		○	○	○		6 地点
	ミズカマキリ	—	○	●	●	○			○		○	4 地点
	ヒメミスカマキリ	—	○									1 地点
	コオイムシ	要注目種（部会注目種）	●	●	○	○	○	○			○	5 地点
	オオコオイムシ	—			○	○						2 地点
	クロゲンゴロウ	準絶滅危惧				○						1 地点
	ハイロゲンゴロウ	—	●			●	○				○	2 地点
	コシマゲンゴロウ	—		○	○	●				○		3 地点
	クロズメゲンゴロウ	—	○			●	○				○	4 地点
その他	コツブゲンゴロウ	—	○									1 地点
	ツチガエル	準絶滅危惧	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9 地点
	トノサマガエル	準絶滅危惧	○	○	○		○	○	○	○	○	8 地点
	魚類	絶滅危惧Ⅱ類	○	○		○						3 地点
各地点で確認された種数			9 種	6 種	5 種	7 種	5 種	4 種	4 種	5 種	6 種	

注. レッドリストは絶滅のおそれのある野生生物の種のリストのこと。○印は生息を確認したことを表す。各調査地点は詳細を伏せるため、便宜的に「st.○」と表記した。

○印……生息を確認した種 ○印……今年度新たに調査地点で確認された種 ●印……去年度は確認できたが今年度は確認できなかった種

(2) ビオトープの管理

st.2 のビオトープでは、地元の NPO 法人「ひずるしい鎮玉」との協働によって水生生物の生息環境を整備した。例えば、水辺を浚渫し、浅い水辺を造成した。水生昆虫の生息や越

冬場所として機能すると思われる。また、繁茂し過ぎていたフトイ・イグサなどの水草を除草し、刈った草は、堆肥置き場に積み上げておくことで、水生昆虫の越冬場所を創出した。この活動によって、2016年度から続くタガメの繁殖や越冬が今年度も確認された。生息環境が整備されることで、安定した生息地として機能している。

(3) 引佐北部小中学校でのビオトープ作り

引佐北部小中学校の生徒(中学1～3年生相当)15名を対象に、小中学校が保有するビオトープで、多くの生物が住むためにはどうすればよいかワークショップを開催した。地域を代表する水生昆虫を実際に観察した後、生徒達の要望から、ビオトープの改善策を提案した。提案を具体的に行う方法を班ごと議論した。この活動から、学校ビオトープに愛着を持ち、生徒達自らの手でビオトープを改善し、地域の生物多様性の保全に関心を持つきっかけを提供できた。



図 1. 生物調査



図 2. 水草の除草



図 3. 引佐北部小中学校
でのワークショップ

3. 考察

生物調査によって、今年度新たにヒメミズカマキリやオオコオイムシが確認された一方、一部の調査地点では、今年度は発見できなかった種もいる。また、絶滅が危惧されるタガメは2か所の調査地点のみで確認された。このように、水生生物にとって、引佐地区は未だに危機的な状況にあると推測される。当地域の水生生物を保全するには、ビオトープの造成などによる生息地の復元や創出が必要であると考えられる。

ビオトープの管理によって、st.2の水辺環境が改善された。水生生物の理想的な生息空間を創出したことで、地域の生物多様性の向上に寄与したと言える。

環境教育講座では、毎年生徒と交流することで水生生物の保全への理解が深まっている。今年度の講座では、生きている水生昆虫を観察する機会を作ったが、生徒達の関心が非常に高かった。今後も継続的に講座を行い、保全活動への意欲を抱かせることが大切である。

4. 今後の展開

今年度、st.1とst.4で水生生物を捕食するコイが確認された。駆除活動や、コイが侵入できない水辺空間の造成が緊急の課題である。また、引佐地区の住民向けに、私たちの活動を知ってもらう機会を作り、住民への理解を広めたい。引佐北部小中学校のビオトープの環境改善活動も、実際に生徒たちと一緒に取り組む機会を持ちたい。

学生トレーナーによる高校運動部に所属する生徒へのセミナー事業

所属：トレーナーサークル CATS

健康プロデュース学部 心身マネジメント学科

4 年 高橋輝、永田泰規、

3 年 小山和泰（代表）、草富新吾、鈴木達也、山崎直人

2 年 齊藤知里（会計）、浅井美月、神田幸伸、寺田一成、松本駿平

1. 目的・概要

近年、熱中症での死亡事故や、運動活動中のけがによる重大事故が発生している。また、スポーツ傷害への不適切な対応のため、高校までのけがの影響を持ったまま大学スポーツを行う選手も見受けられる。これらを予防、対処するのが私たちアスレティックトレーナーの役割であり、より多くの高校生に熱中症やケガの予防に対する知識と関心を持ってもらう事で、スポーツ中の事故減少に貢献出来るのではないかと思います、今回のセミナー事業の実施に至った。

2. 事業内容・方法

内容：

「トレーナーの豆知識」と題し、スポーツ傷害の予防や対処法に関するセミナーの実施

対象：

高校運動部に所属するマネージャー、選手やスタッフ、トレーナーに興味を持つ方

日時：

第1回目：7月21日（土） 第1回目：熱中症予防と応急処置、ケガの予防

第2回目：7月22日（日） 第2回目：熱中症予防と応急処置、ケガの予防

第3回目：8月26日（日） 第3回目：熱中症予防と応急処置、ケガの予防

いずれも 13～15 時（12 時半受付開始）

場所：

常葉大学浜松キャンパス トコハアリーナ内リコンディショニングセンター（RCC）

セミナー内容：

①熱中症の予防と応急処置

②ケガの応急処置（RICE 処置）

③テーピング（足関節内反捻挫予防、アーチサポート）

④その他、セミナー申し込み時のアンケートに書かれていた要望に沿って質疑応答（各種目や競技への対応など）

3. 事業成果

3回のセミナー実施で、44名（教員・保護者6名）の参加があった。

- ・引率でお越しいただいた、浜北西高等学校の教頭先生には、高校への出前講座の可能性を訪ねられる等、関心を示していただけた。
- ・また、今回のセミナー広報にあたり、フリーペーパーの Jr. Athlete さんの協力も得られ、中高生やその保護者、指導者が閲覧する HP や SNS で県内全域に広く広告できた。結果的には、大会などと重複しセミナー受講が叶わなかったが、中部、東部からの問い合わせもあり、ニーズの高さがうかがえた。
- ・また、活動主旨に賛同していただき、Jr. Athlete の取材を受け、水分補給や熱中症予防に関する記事を掲載していただけたことで、セミナー参加者にとどまらず、多くの方に情報を提供できたことは、副次的な成果と考える。

4. 今後の展開

- ・内容について

今回のセミナーでは、開催時期を考慮し「熱中症予防と対処法」が中心となったが、今後は「スポーツ傷害予防」や、高校への出張セミナーなども実施できると良い。

- ・開催時期について

今回行った全3回のセミナーは全て夏に実施したため、冬のトレーニングが増える時期や、中学から高校に上がり運動の環境が変わる時期など、ケガが増える時期にもセミナーを行う事で、よりスポーツ傷害の予防に貢献できると思われる。

- ・資料作成と配布について

今回のセミナーで行った内容などを冊子等にまとめ、受講者や近隣高校に配布することで、スポーツ傷害予防や対処法の普及が進むと考える。但し、あまり資料も多く出来ない為工夫が必要である。



自分でできるカラダケア

所属：健康鍼灸学科ボランティアサークル S i n Q

健康プロデュース学部 松葉カロリナ温海（代表）、荻田真弥、田原伊織、落合恭平、鈴木駿、
瀧戸翔太、仲野翼、小泉海斗、栗田京香、守屋輝咲、山田樹莉亜、
吉田彩那、伊藤駿弥、原田智史

1. 目的・概要

私たちが中学、高校生だった頃、部活動でケガをして、その治療の中で「はり・きゅう」と出会いました。大学で「はり・きゅう」を学ぼうと、自分と同様にケガで苦勞している選手のケアをしたい、という気持ちを持つようになり、この活動を始めました。

このプロジェクトは浜松市内の中学校からの依頼を受けて、私たちが運動部の生徒に対してケガの防止やセルフケアの方法について指導するものです。私たちの知識と技術を中学生に伝えることによって、「はり・きゅう」を学ぶ意識を高め、この活動を通じて、地域のみなさんに東洋医学を知ってほしいと思っています。

2. 事業内容・方法

浜松市との連携事業「大学生による講座」に応募していただいた浜松市の協働センターと運動部の中学生に対するセルフケア講座を企画しました。

今年度は湖東中学校、亀玉中学校、北浜中学校・北浜東部中学校で「自分でできるカラダケア」講座というタイトルで実施しました。湖東中学校では女子卓球部、女子バレー部、女子ソフトボール部、女子バスケットボール部の生徒51名。亀玉中学校では男女卓球部、男女陸上部の生徒54名。北浜中学では男子サッカー部の生徒29名。北浜東部中学校では男子野球部、男女バレー部、男女剣道部の生徒55名を対象に行いました。

講座の内容は、ケガを予防するための筋力をつける体幹トレーニングやチューブトレーニングを紹介し、実際に私たちが指導しながらトレーニングを行いました。また肩や膝、腰などの運動時の違和感に対応するツボを紹介し、ツボ押しの方法やツボ刺激ツールの貼付などの東洋医学的なセルフケアも指導しました。

3. 事業成果

参加してくれた中学生からは以下のような感想をいただきました。

「ゴムチューブを使い、体幹を鍛えることができてよかった。」「腕や足に、体を整えるためのいくつかのツボがあることがわかった。」「実際にツボにシールを貼ってもらって、わかりやすかった。」「グループに分かれて、細かく丁寧に指導してもらうことができた。」

私たちも中学生と触れ合う中で、専門用語を使わずに説明することの難しさを感じましたが、それが知識を整理することにもなり、とてもよかったです。また、ツボを使ったセルフケア指導では、実際に痛みが和らいだり、動きが改善したりする様子を見て、効果を実感できました。自分の体験からケガ予防の話をする 것도できて、セルフケアの重要性をきちんと伝える事ができたと思います。



<自分でできるカラダケア実施の様子>

4. 今後の展開

今回講座を実施した中学校からは以下のようなご意見をいただきました。

「受講生からも学校の先生(教頭先生、運動部顧問の先生)からも好評であり、来年度以降も主に中学校の部活に焦点を当て、健康、スポーツ系の講座を実施していきたい。」

健康鍼灸学科では、スポーツに関心のある学生が多く、中学の運動部でセルフケアを指導することは、地域貢献と同時に、私たち自身の知識を確認したり、施術の効果を実感したりと、大きな意味があると思います。この「大学生による講座」の試みは3年目を迎えますが、今後もこの活動を継続させ、より充実したものにしていくために、学科内の各学年の交流や、勉強会の開催などを積極的に行っていきたいと考えています。

大学生による「災害支援共助システム」構築に向けての実践的活動

所属：3.11 はままつ東北復光プロジェクト

1. 目的・概要

本プロジェクトでは、30 年以内に 70～80%の確立で起こるといわれている南海トラフ巨大地震に備え、静岡大学、浜松学院大学、静岡産業大学、浜松医科大学など近隣大学のボランティアサークル、団体との平常時からの顔の見える関係づくりを構築し、災害時に互いに連絡を取り合い、助け合うことのできる「災害支援共助システム」（山本・佐藤，2017）の構築を目的とする。

具体的には、それぞれの団体がお互いの長所を活かした啓発イベントを実施する。イベントを通じて互いに学び合い、活かすことのできる知識の共有や情報の提供など、互いの知見を広げるきっかけ作りを行っていく。これらの活動を通して浜松市の近隣大学及び地域団体による横のつながりを構築することで災害に強いまちづくり、ひとづくりに繋げていく。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の 4 つの事業を実施した。

① 「留学生にとって災害に備えるとは」

静岡大学で留学生を支援しているボランティアサークル「話っ、輪っ、和っ！実行委員会」と連携し、留学生と災害を考えるきっかけづくりの場としてブレインストーミングを行う。防災グッズ作り、非常食の試食、災害時の保存食づくりなど、お互いの価値観を共有し良い関係づくりを構築することを目的に実施する。



② 「私たちが伝えたい東北の今」

浜松学院大学ボランティアサークル「HAP ハマガク」と連携し、両サークルの被災地での現地支援活動の報告会、写真展や、現地の様子を映像にて紹介。実際に見た被災地の様子を多くの人に知ってもらう機会を提供する。

③ 「外国人目線で考える日本の災害」

聖隷クリストファー大学のサークル「Global English」と連携し、防災減災を考えるだけでなく、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会や 2020 年東京オリンピックを見据え災害時に自分たちがどのように外国人被災者を助けられるかを学ぶ。実際に外国人教授にどういった支援が欲しいかを伺い多角的視点で支援の在り方を考える機会を設ける。



④「東日本大震災から学ぶ震災の教訓と南海トラフ巨大地震への備え」

「スポーツサポートとうかい」と連携し、東日本大震災の風化防止、いずれ浜松で起こるとされる南海トラフ巨大地震の関心を目的とし、東北に関するクイズやゲームを通して防災・減災に関する知識を学び、“備える”ことの知識を増やす、知ってもらう機会の提供を行う。

* コラボイベントについては、平成 30 年度浜松ボランティアネットワークフォーラムにて報告した。

3. 事業成果

1) アンケート結果

アンケートでは、共催イベントを行ったことで、防災・減災の意識は高まった（図 2）ことが明らかとなった。また、今後の連携の可能性や関係づくりでは 7 割程度にとどまり（図 2）、今後の継続性も 8 割（図 3）という結果となった。当初の計画通りの運営ができなかったことと、参加団体が学生に限られたことが影響したと考えられる。

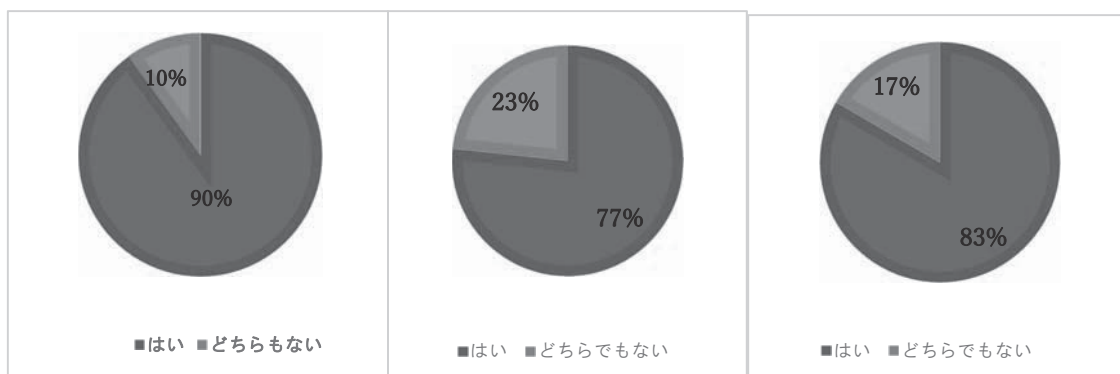


図 1：防災・減災意識の高まり

図 2：連携の可能性・関係づくり

図 3：共催イベントの継続性

4. 今後の展開

共催イベントの効果をみていくためには、今後も継続した活動と学生団体だけではなく、災害系他団体との共催イベントを行っていく必要がある。今年度は学生団体にとどまったが、4つの学生団体とのイベントを通して、お互いの活動を知り、防災・減災への意識を高めることができたと思う。

災害時に求められることは「連携・協働」であり、今後もこのようなイベントを行い、今後は“より強い”顔の見える関係作りができるようにしていきたい。そのために今回実現できなかった団体ともイベントを行い、さらに顔の見える関係作り強化していく必要がある。また、学生の枠組みにとらわれることなく NPO 団体や市民団体の方もこのイベントを通して関係性を構築し、「災害支援共助システムの構築」（山本・佐藤，2017）へ向けて、継続した活動を展開していきたい。

NP0 法人との協働による浜松市北区井平地域の活性化プロジェクト

所属：経営学部浜松キャンパス地域貢献サークル Cocoa

経営学部経営学科 中村 一生（代表）、杉浦 奏、川尻 郁矢、太田 璃玖、大石 由佳
高倉 陽和、高須 琴巳、藤田 隼太

1. 目的・概要

浜松市北区伊平地域で活動している特定非営利活動法人（NP0 法人）いーら・いだいらと協力し、伊平地域の活性化を目的とする。伊平地域は浜松市北部の山間部にある集落で、中心部と比べて高齢化・過疎化が進んでいる地域である。本プロジェクトは、活動の担い手として大学生が参加し、地域の団体・住民と協力しながら地域活性化活動を行っていくプロジェクトである。

プロジェクトの実施主体は、経営学部浜松キャンパス学生で構成する地域貢献サークル Cocoa のメンバーである。地域貢献サークル Cocoa では、これまで奥浜名湖商工会との協力事業である奥浜名湖バリューアッププロジェクトを通じて NP0 法人いーら・いだいらと協働事業を実施してきた。今年度からは、とこは未来塾のプロジェクトとして、NP0 法人と協力しながら、一年を通じて企画段階から参加し事業を実施してきた。

2. 事業内容・方法

事業の内容は、NP0 法人いーら・いだいらが開催する地域活性化イベントの運営協力、イベント内容の企画・提案、SNS を活用した広報活動などである。伊平地域には多くの観音像が残っており、「観音の里」として地域の PR を行っている。また、井伊氏の一族である井平氏が領主を務め、戦国時代に本拠としていた井平城跡がある。今年度は、歴史と文化、自然が残る伊平の魅力を伝えるイベントを NP0 法人と協力しながら、一年（4 月・6 月・9 月・2 月）を通じて実施してきた。主な活動として、以下をあげることができる。

①観音の里祭り等におけるトレッキング・イベントの支援



観音の里祭り等におけるトレッキング・イベントにおいて、参加者の安全確保とスムーズな運営のために、コース案内役およびペース・メーカー役を務めた。例年実施されるコースである井平城跡から各観音を巡るツアーでは、これまで Cocoa が協力して整備した城跡内のルートが採用されている。また、2 月実施のトレッキング・イベントでは、これまでとは異なるコースでの開催し、併せてスタンプ・ラリーを実施し、リピーターを含めた多くの参加者を集めること

ができた。

②観音の里祭り等における地域特産品の販売、全体スタッフとしての支援

地域の特産品の紹介を兼ねた販売ブースの運営を行った。地域の商品の販売などを行ったが、NPO法人と Cocoa の名称が入ったオリジナル・パッケージを利用した商品の販売も行った。また、会場の設営やイベント開催中の案内など、イベント全体のスタッフとして活動を行った。

③Cocoa が中心となるイベントの開催

Cocoa が主催者となって実施するイベントの企画・提案を行った。イベントが実施されていない夏場に行く企画としてバーベキュー大会を企画・提案した。実施が決定し準備もすべて完了していたが、当日あいにくの大雨となり中止となった。しかしながら、学生から提案して実施するイベントに取り組んだことに、地域の方々から評価をいただいた。また、2月に開催された観音の里祭りでは、子どもから高齢者まで参加できるイベントとしてボッチャ大会を実施した。この大会は学生が企画・提案し、運営の中心となって行ったものであり、多くの方に参加いただくことができた。

3. 事業成果

過疎化・高齢化の進む地域では、地域を活性化するためのイベントを実施することだけでも困難があり、学生が運営を支援・補助することでスムーズに実施することが可能となっている。また企画段階から参加することで、学生の自由な発想を地域の活性化に活かすことができている。さらに、継続的に事業を行っていることから、地域の住民の方々に常葉大学および地域貢献サークル Cocoa の活動の地域貢献活動を認知いただけるようになってきている。学生にとっても、経営学部で学んだことを実践し経験できる場として機能している。特に企画段階からの参加するようになった今年度は、これまでよりも多くの経験を得ることができた。

4. 今後の展開

より多くの人に伊平に足を運んでもらうこと、伊平を知ってもらうための活動をNPO法人と協力しながら実施していく予定である。今年度はSNSで情報発信を一部行ったが、SNSなどのIT技術をうまく活用した、より広範囲に伊平をPRできる方法を検討していきたい。



ブレス浜松×ThunderBirds 地域活性化プロジェクト

所属：常葉大学ボランティアサークル ThunderBirds 山内紅音

1. 目的・概要

浜松市を活動拠点とする女子バレーボールクラブ「ブレス浜松」と連携し、浜松市内での地域クリーンイベントを実施する。本事業にはパワー浜松ロータリークラブの会員や、浜松市市民協働センターのボランティア体験講座を通して参加した中高生など、様々な団体や年代の参加者が交流を図るとともに、地域の活性化に寄与することを目的とする。

2. 事業内容・方法

本事業では浜松城公園周辺の清掃活動と、バレーボールに関連したアトラクションを実施する。

清掃活動では参加者を1グループ約15名ずつ分け、さらにブレス浜松の選手が各グループに入り、浜松城公園とその周辺のルートをグループごとに清掃する。

アトラクションでは「バレーボール」をテーマにした〇×クイズやミニゲームを行い、チームごとに競い合う。

これらにより、バレーボールやボランティア活動をすることに対し、興味・関心を抱くきっかけになる。

3. 事業成果

本事業の参加人数は140名であり、その内訳は以下の図に示す。(図1. 参加者内訳) その中で参加者の年齢をアンケート調査したところ、10代以下から60代までの参加者が集まったことがわかり、老若男女問わず多くの年代同士が交流できる機会となった。

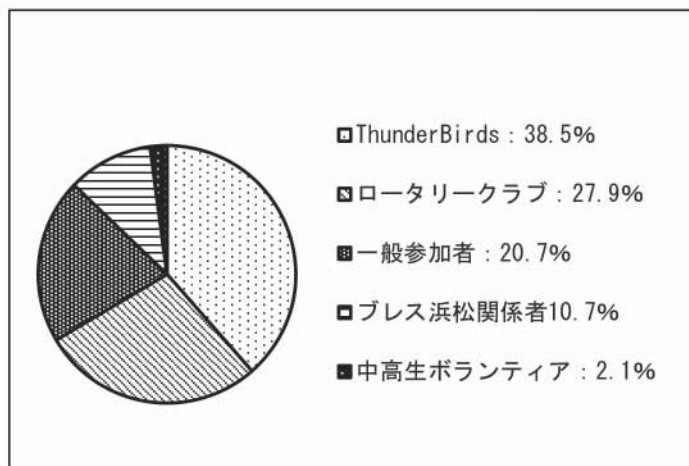


図1. 参加者内訳

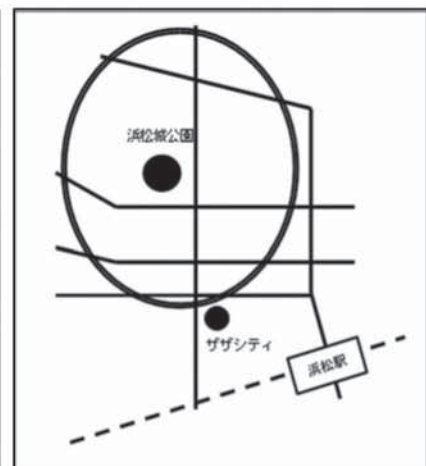


図2. 清掃範囲

清掃活動における成果では、約 40 分かけ浜松城公園とその周辺の清掃を行った。清掃範囲は「図 2. 清掃範囲」に示し、丸枠の範囲を清掃した。450 のゴミ袋の約 6 個分のゴミを拾うことができた。

アンケート結果より、参加者からは「楽しい清掃ができた」「個人的に奉仕作業をしようと思ってもできないから良かった」「いろいろな人と交流ができた」等の感想が寄せられた。



写真 1. 活動の様子(清掃活動)

アトラクションにおける成果では、バレーボールのミニゲームではチームごとに声を掛け合い、より多くのラリーが続くよう団結していた。ラリーの回数が増えるにつれ、周囲でプレーを見ている他のチームからは歓声があがり、プレー終了時には拍手を送るなど、チーム内だけではなく、参加者全員が交流を深めていた。

主にバレーボールのルールについて問題を出した○×クイズにおいて、参加者同士で相談する様子が見られ、ミニゲームとはまた違った雰囲気があった。



写真 2. 活動の様子(ミニゲーム)

4. 今後の展望

今回の活動では、参加者同士が交流を深め、環境美化活動の意識が向上したとともに、地域活性化のきっかけとなったと考える。さらに、今回イベントの運営ボランティアとして参加した中高生には、ボランティアへの参加の意義や、活動の楽しさを伝えられた良い機会となったと考える。

また、本事業をきっかけに当団体の多くのメンバーが毎年参加する「3. 11 復光キャンドルナイト」において、ブレス浜松やロータリークラブから協力を得るなど、団体同士の関係づくりにも前向きに影響した。

参加者からは、ぜひ来年度もこのような機会を設けてほしいという意見があったため、今年度以上に清掃活動や交流の時間が充実した内容で、今後も継続的に行っていききたい。



写真 3. 全体写真

本事業は静岡新聞から取材を受け、平成 30 年 9 月 20 日の朝刊紙面に掲載された。

障がい者スポーツを知り、体験し、楽しむ

所属：障スポ☆ＳＣ（障がい者スポーツサポートクラブ）

保健医療学部理学療法学科２年 酒井雄飛（代表）

1. 目的・概要

障スポ☆ＳＣでは、学生を中心に、多くの人に障がい者スポーツというものを実際にやってもらうことにより障がい者スポーツを知ってもらう、楽しんでもらう活動をしている。

将来的には、高齢者や障がい者の方々と多く接していくため、多くの人と触れ合い、会話することにより学生のうちからその人たちの苦労や困っていること職業につく前から感じることが出来る。また、そのほかの多くの人に障がい者スポーツを体験してもらうことにより、障がい者に対する壁やバリアを少しでも取り除いていけるような活動を目的としている。



2. 事業内容

主には、ボッチャというスポーツのボランティアに参加しており、年間に大きな大会が浜松に２回、豊橋で１回、静岡県大会が１回ある。そのほかには、毎年行われる浜松市障害者スポーツ大会や電動車椅子サッカー選手権大会、みんなでスポーツ教室などに参加させていただいている。それぞれ大会では、運営の手伝い、準備、片付け、審判などを行っている。また、競技の参加や選手の手伝いもさせていただいている。参加者の人と楽しみながら、協力しながら競技をすることでその人や周りの人と仲良くなり、いろいろな話をする事が出来た。

また、学校祭のキトルス祭では、自分たちのブースを出しボッチャ、車椅子バスケ、シッティングバレーを行い多くの人に体験してもらい、楽しんでもらうことが出来た。



3. 事業成果

サークルの活動として、20 件のイベントに参加・企画を行った。参加してくれた学生は、みんな楽しんでもらえている。学生にも障がい者スポーツを知ってもらえる機会になっている。多くの人と触れ合うことができ新しい企画やボランティアをその機会に声をかけていただくことも出てきた。キトルス祭やショッピングモールでの障がい者スポーツ体験では、来場してくれた多くの人に楽しんでもらっていただき、特に、小さい子に楽しんでもらい、知ってもらえたと思う。

4. 今後の展開

今後は、これまで参加してきたボランティアに参加することはもちろんのこと、キトルス祭以外で自分たちが企画して活動することをしていきたい。具体的には、特別支援学校や小学校へ出向き障がい者スポーツを行い、多くの年代の人に障がい者スポーツを知ってもらえばよいと思っている。また、新しいスポーツのボランティアに参加していきたいと思っている。そうすれば自分たちが伝えられるスポーツがもっと増え、これまで興味がなかった人にも興味を持つきっかけとなると思っている。そして、2020 年には東京でオリンピック・パラリンピックが行われるため少しでも選手のサポートや試合の手伝いができるばよいと思っている。

都田の子どもと自然を繋げよう！！

所属：健康プロデュース学部 こども健康学科 中村ゼミ

加藤亜弥(代表) 川島美南海 岸直人 高橋里佳 山田航星 山田凧紗 柳澤陽香

湯山雄都斗 渡邊美南海

1. 目的・概要

都田の自然を子どもたちに体験してもらうことで、自然の良さに気づく目や人への思いやりを感じる心などを養うことを目的とする。今の子どもたちは自然体験が少ないので、都田の自然を通してたくさんの自然を知ってもらいたい。

また、日本の伝統的な行事に触れる機会も減ってきている。行事の遊びを体験することで、日本の伝統文化を受け継ぎ、子どもたちが将来大人となった時に自分たちの子ども達へ受け継いでいく。

子ども達との交流を通して地域貢献をすることを目的とする。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の3つの事業を実施する。

①みどりのもり都田の子ども達の様子を知るため園見学

みどりのもり都田さんとは学科の授業を通して交流があり、4月から何度も園見学をさせていただいた。園見学を通して、木の床を裸足で歩くことで木のぬくもりを感じ、冬場でも子どもたちが元気よく生活している。

②指導案を作成し、園長先生とのオリエンテーション

オリエンテーションは指導案作成前後の二回行う。一回目のオリエンテーションでは園見学では見きれなかったこと、どの保育室をどのように使ってよいか、活動を行う上での注意事項を園長先生に教えていただく。年中と年長の2つのグループに分かれ、案を出し合い、指導案を作成する。

完成した指導案を園まで持っていく、主任の先生や園長先生と流れや改善点などを確認した。その後も昼休みなどの空いている時間の中で、教材研究を行ったり指導案を修正したりする。

③みどりのもり都田での模擬授業

年中は保育室で、年長は園庭で活動を行った。両グループとも正月遊びをテーマとする。

年中は木製の駒を人数分用意し、使用する。導入として絵本「みんなで餅つき」の読み聞かせをし、子ども達がポスターカラーを使って駒のデザインをする。保育者と学生は、子どもたちに声掛けをしながらその様子を見守る。駒が完成したら、子どもたちは学生にアドバイスをもらいながら駒回しを体験する。難しさに悔し涙も見られ

たが、オリジナルの駒で遊んだことに達成感や満足感を感じる。

年長は園庭で羽根つきで遊ぶ。導入として猛獣狩りゲームをして、ゲーム内で羽根つきのグループを作る。羽子板は色々な大きさの段ボールを使用し、じゃんけんで1グループ1つ段ボールを選ぶ。羽は紙風船、風船、ビニール袋の中から子ども達に選んでもらった。その結果風船を使うことになる。当初指導案では、2グループの対抗戦の予定だったがチーム数が多かったため、同時に4グループが対戦する。1つの段ボールをメンバー全員で持ち、風船を打ち合って遊ぶ。



〈模擬授業の風景 左：年中の駒の色塗りの風景 右：年長の羽根つきの風景〉

3. 事業成果

年中では、木製の駒を使ったことで子どもたちが木の温もりを体感しながら駒の色塗りを楽しむ。また、絵本や駒回しを通して、日本の伝統的な正月遊びを学生や友達と学ぶ。しかし、活動の時間配分や役割分担が思い通りにいかず、また子どもたちが駒を回す広さも十分でないため、準備不足が感じられる。その中でも、子どもの行動をよく観察し、臨機応変に対応する。

年長では、各グループのメンバーと協力をしながら羽根つきを楽しむ。羽根つきを通して、伝統的な正月遊びや仲間と協力することの楽しさを学ぶ。しかし、ルール説明が上手く出来なかったために、予想通りにゲームを進行できなかった。また、段ボールや風船の色を子ども達に決めてもらう際に少し揉めてしまうところがあったり、全員の意見をくみ取れていなかったりしたので、もう少し準備や工夫が必要だと感じられる。

4. 今後の展開

従来の実践や今回の成果から、より多くの子どもたちにより効果的に日本の伝統的な遊びを伝えていくにはどうしたらいいか考え、他の保育現場や学校での子どもとの触れ合いの機会を通して積極的に実践し、内容を深めていく。

南海トラフ巨大地震に活かす健康サポート支援に関する調査研究 大学生による熊本地震「こころとからだ」の健康サポートプロジェクト

所属：健康プロデュース学部 栄養学科 4年 松浦莉子(代表)

1. 目的・概要

ボランティアサークル ThunderBirds では 2016 年に起こった熊本地震において、「こころとからだの健康サポートプロジェクト」を継続実施してきた。

熊本日日新聞の調査(2018)によれば、健康に不安や不満を持つ人は、2017 年の調査から 3 倍に増加し、震災関連死も 200 名を超えている。

本事業では、熊本での健康サポートプロジェクトを継続実施するとともに、被災者の健康に対するニーズをアンケート及びインタビューにより調査し、来たるべき南海トラフ巨大地震に活かすことのできる、こころとからだの健康サポートのあり方を明らかにすることを目的とする。

2. 事業内容

こころとからだの健康サポートプロジェクト/現地活動内容。

①SinQ ブース

利用者数：86 名（3 日間延べ人数）

仮設住宅の住民を対象に、もみほぐしや足湯を行った。
施術を行いながら震災当時の様子や健康上の悩みなどを聞きサポートを行った。



②TOKOHAMA カフェ

利用者：102 名（3 日間延べ人数）

益城町テクノ仮設団地で 3 日間、益城町社会福祉協議会で半日、カフェを開設し、健康サポート BOOK、静岡茶と静岡のお菓子を提供した。住民同士の憩いの場を作ることができた。



③広安西小学校

3 日間にわたり、1～3 年生の授業サポート、登校の見守り、環境整備を行い、2 日目の放課後には 1～3 年生の希望児童約 130 名に対しピカピカどろだんご教室を行った。



④社協サロン活動

利用者：10名

益城町社会福祉協議会との連携・協働で、活動3日目に約30分間のストレッチ指導。カフェを開設し、サロン活動を行った。

仮設住宅、社協サロン活動にて、利用者を対象にアンケート調査を実施した。小学校では、教員を対象にアンケート調査を行った。



3. 事業成果

こころとからだの健康サポートプロジェクトのアンケート結果

大学生による健康サポートについての回答では、93%がとても良いと回答した。仮設住宅に住む被災者にとっても満足のいくサポートとなった。(図1)

小学校の教員アンケートからは、今後も大学生に健康サポートを行ってほしい(92%)との結果が得られた。(図2)震災から2年半が経過しても、精神的に不安定な児童やサポートが必要な児童がいることがわかった。また、「子どもたちの気持ちを落ち着ける運動やストレッチなどを一緒にやってほしい」、「子どもとふれあう活動をさらに進めてほしい」など、新たなニーズが得られた

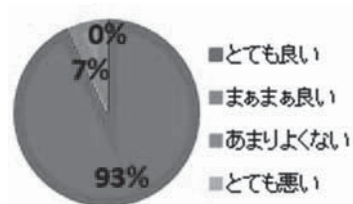


図1: テクノ仮設住宅

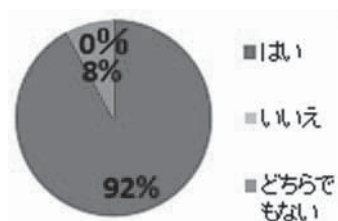


図2: 広安西小学校

4. 考察

災害時における大学生による健康サポートは、被災者にとって心身の回復に有効であることが明らかとなった。また、仮設住宅は同じ境遇でできたコミュニティであるため、被災者の心のよりどころになっており、特に高齢者では仮設住宅から復興住宅へ移転することによる新たなコミュニティの形成に不安を感じる声が多く聞かれた。

子どもに対しては、今後も継続した心身のケアが必要である。現在も、仮設住宅で暮らしている児童もあり、住環境の整備やストレスを発散できる場所の設置が必要である。今後、起こりうる南海トラフ巨大地震後の子どものケアに、大学生は遊びを通して継続的に関わることはできないのではないかと考える。

<連携先>

益城町立広安西小学校、キャンナス熊本、益城町テクノ仮設団地、益城町社会福祉協議会(益城町地域支え合いセンター)

とこは未来塾 -TU can Project

平成 30 年度採択プロジェクト
ポスター集

— 31 —

静修活性化プロジェクト ～植物と繋ぐ地域の伝統～

常葉大学 社会環境学部 浅見ゼミ2年 森川佳祐 水谷真菜 大庭峻輔 大川佑真 高田武瑠 石川稜 増田敦人 菊地賢記 勝海貴裕

～活動内容の紹介～

- ・舞台となるのは、浜松市天竜区春野町。ここに民宿とカフェを営んでいる大脇さんという方と、その地域に育ち、伝統的な草花あそびであったり野草の活用を知っているトミちゃんにご協力をいただき、植物を利用した地域活性を目指して活動を行いました。
- ・伝統的な植物の利用法を映像資料や紙媒体にまとめ、大脇さんの経営する「トンネルカフェ」、「静修CLUB」にて放映、配布をします。その地に訪れる来訪者にはもちろん地域住民の方々にも知っていただくことで、静修の伝統知を継承していこうというものです。



←大脇睦彦さん

静修CLUB、トンネルカフェのオーナー。静修の活性化に努めている。



←羽入富代さん(トミちゃん)

静修の中でも随一の植物の知識を持つ。



静修CLUB

～年間活動日程表～

5月	初顔合わせ、植生調査
6月	植生調査(ブドウザンショウ、ミョウガ、など)
7月	植生調査(カラムシ、テイカカズラ、ノビル、など)
8月	植生調査(ヤブカンゾウ、ウラジロ、など)
9月	植生調査(ゼンマイ、メヒシバ、など)
10月	植生調査(センブリ、クロモジ、など)
11月	中間発表、聞き取り調査チラシ配り
12月	聞き取り調査(交流会・試食会)
1月	結果報告の作成
2月	パンフレット、映像資料作成
3月	パンフレット、映像資料完成、提供

～12/12 試食会～

今回の試食会は、静修のお住まいの熟年CLUBのみなさまにこちら側が提案する、静修で採取した植物を使った料理を提供し、我々の活動を知っていただく機会として設けました。



クロモジ茶



鮭の朴葉味噌焼き



地域に伝わる植物の伝統知を調査すべく写真付きの資料を用意し、伝えるだけでなく、植物を実際に用いることで記憶を掘り起こしてもらい、試食をしていただきながら聞き取り調査も行いました。



どこでその植物を見たのか、利用したのか、それらも併せて思い出してもらうため、GIS(地理情報システム)を駆使し植物の分布を地図化しました。

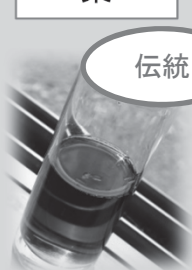
～まとめ～

我々が静修で学んだ伝統知は数多くありました。イヌマキの手裏剣やテイカカズラの風車などの遊び、センブリやドクダミを使った整腸薬などがあげられます。この様な伝統知は自然とともに生活している静修だからこそ残っているものです。12月に行かせていただいた熟年CLUB全員の方に参加していただいた交流・試食会においても様々な伝統知を教えていただき、一部の人が知らないのではなく地域の方がみな知っている伝統知なのであるということを知りました。こうした知識は自然とともに生活しているからこそ生まれるものであり、身の回りの自然との関わりが減ってしまった生活の中では薄れていってしまうものです。こうした伝統知を絶やさないためにも少しでも皆さんに知ってもらえるよう、継続した活動を検討しています。



～伝統知と新たな提案～

薬



ドクダミ茶

伝統

伝統



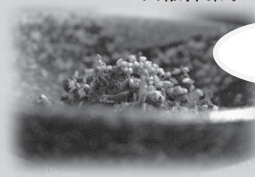
ヘビイチゴの焼酎漬け

料理



山椒抹茶ケーキ

提案



クサギの胡麻和え

提案

遊び



イヌマキの手裏剣

伝統

伝統



テイカカズラの風車

結果

薬、遊びに関しては、静修に伝わる伝統知が多く確認できたが、料理に関しては情報が少なかったため、こちら側で提案し新しく静修の魅力として発信できる材料となるようにした。

結果

この試食会により、地元の方々へ伝統知を提示し、再確認していただく場を提供すると共に、今後作成する情報発信のための映像資料、パンフレットに掲載する情報を充実させることができた。

地域全体を「人と自然とが共生する」エコミュージアムに！

西里市清水森林公園 やすらぎの森 全体図

農業の活性化

農業を維持することで、農地や農村を維持していく

生物多様性の保全

多くの生き物が棲みやすい環境を守り、誰もが生き物と出会える場所にする

観光客を楽しませる

観光スポットにすることで、西里村を訪れる観光客を増やし、地域全体を活性化させる

環境教育の場づくり

農村で実施することで、単なる「食育」や「農業教育」ではなく、より具体的な「人の暮らし・社会と自然との共存」というメッセージを子どもたちに与えることができる

今年度の活動実績

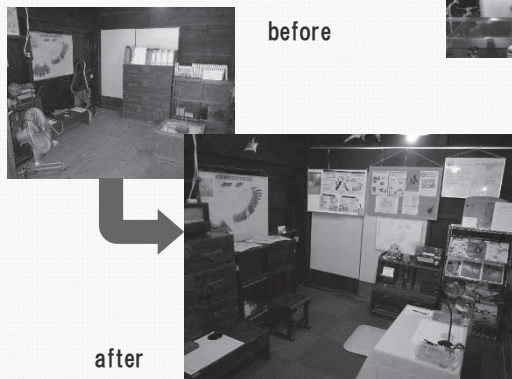
ビオトープの改善



ビオトープ(生き物が棲む空間)の改善作業を地域住民や市民と協働して実施しました。今年度はカエル類の生息環境に着目し、繁茂しすぎた水草の除草、浅い止水の水辺の創出、ホダ木積み等を行いました。

古民家を利用した博物館づくり

生物多様性(生態系サービス)を守っていくために重要なのは、生物多様性の大切さを多くの人に知ってもらうことであると考え、地区内にある古民家「安来里」に博物館展示を実施し、情報発信の拠点としました。



豊かな里山環境が現存する西里村を主なフィールドとして、6月と7月に常葉大学教育学部附属橘小学校の1年生から6年生までの児童を対象とした環境教育教室を実施しました。プログラムの考案・運営を学生が行いました。(8月は台風の影響により、中止しました。)

親子環境教室



ハンター入門講座



野生動物による農作物の被害を減少させるため、狩猟免許試験の対策になる「大学生の大学生による大学生のための」ハンター入門講座を開きました。

西里村・特産品の提案

農作物と動物の間には相利共生の関係があり、農業体験をすることによって野生生物と食糧の生産が不可分に結びついていることを実感してもらうために、原産地が日本を中心とした東アジアの作物で野生生物と関係のある作物の中から、西里村に適応した農産物を生産し特産品となる物を提案することで、農業を維持していく仕組みを考えました。

プロジェクトメンバー

小杉山 晃一准教授 小松 千紗 竹内 友美 小川 龍太郎 平野 翔大 望月 琴乃

背景

- 浜松市北区は豊かな自然環境を有し、水生生物の宝庫だった
 - ➔ 農薬への依存、耕作放棄地の増加、外来生物の侵入などの原因から、多くの種が危機的な状況にある
- 長年に渡る山田辰美ゼミの研究から、特に引佐地区は県内トップクラスの重要生息地であることが明らかになった
 - ➔ 大部分が危機的な状況に瀕しており、一刻も早い保全対策や環境改善が望まれる
- 「いなさお助け隊」は、自然再生の志を高めた学生が、自らの学びと地域貢献を目的に集まった組織
 - ➔ 地元住民の要請を受け、緊急性のある生物の保全活動を実践した

研究成果

①生物調査

水生生物の捕獲調査から、種の多様性や自然環境の経年的な変化を把握する

- 今年度は水生昆虫 18 種(カメムシ類+コウチュウ類) が確認された
- 県内で絶滅に瀕するタガメは 2 地点で確認された
- ヒメミズカマキリやオオコオイムシが新たに確認された
- 一部の調査地点では、今年度は発見できなかった種もいる(st.1とst.2のコオイムシなど)

表. 2018年度に浜松市北区引佐地区において確認された主要な水生生物

分類	種名	静岡県レッドリスト(2017)	調査地点									生息を確認した地点数
			st.1	st.2	st.3	st.4	st.5	st.6	st.7	st.8	st.9	
水生カメムシ類	タガメ	要注目種(部会注目種)	○	○				○	○	○		2 地点
	タイコウチ	—	○	○		○						6 地点
	ミズカマキリ	—	○	●	●	○			○		○	4 地点
	ヒメミズカマキリ	—	○									1 地点
	コオイムシ	要注目種(部会注目種)	●	●	○	○	○	○			○	5 地点
水生コウチュウ類	オオコオイムシ	—			○	○						2 地点
	クロゲンゴロウ	準絶滅危類				○						1 地点
	ハライロゲンゴロウ	—	●			●	○				○	2 地点
	コスマゲンゴロウ	—		○	○					○		3 地点
	クロスマゲンゴロウ	—	○			●	○			○	○	4 地点
その他	ツチカエル	準絶滅危類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9 地点
	トノサマガエル	準絶滅危類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8 地点
	魚類	絶滅危類Ⅱ類										3 地点
各地点で確認された種数			9 種	6 種	5 種	7 種	5 種	4 種	4 種	5 種	6 種	

注. レッドリストは絶滅のおそれのある野生生物の種のリストのこと。○印は生息を確認したことを表す。各調査地点は詳細を伏せるため、便宜的に「st.○」と表記した。
○印……生息を確認した種 ○印……今年度新たに調査地点で確認された種 ●印……去年度は確認できたが今年度は確認できなかった種

②ビオトープの管理

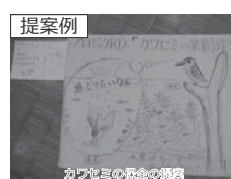
st.2のビオトープでは、NPO法人「ひずるしい鎮玉」との協働によって水生生物の生息環境を整備した

- 浅い水辺の造成
- 繁茂し過ぎた水草の除草
- 水面を覆うカバー(隠れ場所)の設置
- 堆肥置き場の整備 など
- ➔ 3 年連続でタガメの繁殖や越冬を確認、安定した生息地として機能している

③引佐北部小中学校でのビオトープ作り

中学1～3年生15名を対象に、学校ビオトープで、多くの生物が住むためにはどうすればよいかワークショップを開いた

- 水生昆虫を実際に観察した
- 生徒達の要望から、改善策を提案・議論した
- ➔ 地域の生物多様性の保全に関心を持ってもらうきっかけとなった



今後の展望

- st.1とst.4で水生生物を捕食するコイが確認され、駆除活動や新たな水辺の造成が必要
- 地域の住民向けに、私たちの活動を知ってもらう機会を作り、住民への理解を広めたい
- 小中学校のビオトープで、実際に生徒達と一緒に環境改善活動に取り組む機会を持ちたい

1. はじめに

近年熱中症で亡くなったり、スポーツ中の怪我の対処が遅れ大学までスポーツ障害を持ったまま来る高校生が多く見受けられる。そこで、高校の時から熱中症やケガの予防に関心を持ってもらう事で、スポーツ中の事故を減らせるのではないかと思います今回の様なセミナーを開いた。

2. セミナーの概要

常葉大学浜松キャンパスにて「トレーナーの豆知識」と題したセミナーを3回実施。

第1回目：7月21日（土） 第2回目：7月22日（日） 第3回目：8月26日（日）
時間 13：00～15：00 （いずれも同様の内容で実施）

対象：高校運動部に所属するマネージャー、選手やスタッフ、トレーナーに興味を持つ方

3. 実施内容

セミナー名 部活動で役立つ応急処置とテーピング

応急処置の内容：熱中症の予防と応急処置、ケガの応急処置（RICE処置）
テーピングの内容：足関節内反捻挫・アーチサポート

参加人数 1回目12名+先生1名 2回目10名+親5名 3回目16名 計 44名



4. 実施した結果と反省点

・内容について

今回のセミナーでは、開催時期を考慮し「熱中症予防と対処法」が中心となったが、今後は「スポーツ傷害予防」や、高校への出張セミナーなども実施できると良い。

・開催時期について

今回行った全3回のセミナーは全て夏に実施したため、冬のトレーニングが増える時期や、中学から高校に上がり運動の環境が変わる時期など、ケガが増える時期にもセミナーを行う事で、よりスポーツ傷害の予防に貢献できると思われる。

・資料作成と配布について

今回のセミナーで行った内容などを冊子等にまとめ、受講者や近隣高校に配布することで、スポーツ傷害予防や対処法の普及が進むと考える。但し、あまり資料も多く出来ない為工夫が必要である。

自分でできるカラダケア

～浜松市連携事業：大学生による講座～

常葉大学 健康プロデュース学部 健康鍼灸学科 ボランティアサークル「SinQ」

【講座の目的】

このプロジェクトは浜松市内の中学校からの依頼を受けて、
私たちが運動部の生徒に対してケガの防止やセルフケア
の方法について指導するものです。

私たちの知識と技術を中学生に伝えることによって、「はり・きゅう」
を学ぶ意識を高め、この活動を通じて、地域のみなさんに東洋医学
を知ってほしいと思っています。



【講座の内容】

今年度は湖東中学校、亀玉中学校、北浜中学校・北浜東部中学校で
「自分でできるカラダケア」講座というタイトルで実施しました。対象と
なった部活は卓球部、バレー部、ソフトボール部、バスケットボール部、
陸上部、サッカー部、野球部、剣道部で、延べ189人の生徒さんが参加
してくれました。

講座の内容は、ケガを予防するための筋力をつける体幹トレーニング
やチューブトレーニングを紹介し、実際に私たちが指導しながらトレ
ーニングを行いました。また肩や膝、腰などの運動時の違和感に対応す
るツボを紹介し、ツボ押しの方法やツボ刺激ツールの貼付などの東洋
医学的なセルフケアも指導しました。



【講座の成果】

参加してくれた中学生からは以下のような感想をいただきました。

「ゴムチューブを使い、体幹を鍛えることができてよかった。」「腕や足に、体を整えるためのい
くつものツボがあることがわかった。」「実際にツボにシールを貼ってもらって、わかりやすかつ
た。」「グループに分かれて、細かく丁寧に指導してもらうことができた。」

私たちも中学生と触れ合う中で、専門用語を使わずに説明することの難しさを感じましたが、
それが知識を整理することにもなり、とても良かったです。また、ツボを使ったセルフケア指導
では、実際に痛みが和らいだり、動きが改善したりする様子を見て、効果を実感できました。
自分の体験からケガ予防の話をすることもできて、セルフケアの重要性をきちんと伝える事が
できたと思います。

今後もこの活動を継続させ、より充実したものにしていくために、学科内の各学年の交流や、
勉強会の開催などを積極的に行っていきたいと考えています。

大学生による「災害支援共助システム」の構築と実践的活動

3.11はままつ東北復光プロジェクト

【プロジェクトの目的】

当プロジェクトでは、30年以内に70～80%の確立で起こるといわれている南海トラフ巨大地震に備え、静岡大学、浜松学院大学、静岡産業大学、浜松医科大学など近隣大学のボランティアサークル、団体がお互いの長所を活かした啓発イベントの実施。

イベントを通じて互いに学び合うとともに、平常時から顔の見える関係づくりを構築し、震災時に互いに連絡を取り合い、助け合うことのできる「災害支援共助システム」（山本・佐藤，2017）の構築を目的とする。

【取り組み内容・イベントの様子】

「留学生にとって災害にそなえるとは」

静岡大学で留学生を支援しているボランティアサークル「話っ、輪っ、和っ！」と連携し、～留学生とお互いの国の災害について学びあおう～をテーマに災害について学び、考え、体験する事を目的としたイベントを開催。海外の災害について知ることができ、留学生、日本人学生ともに災害について改めて考えるきっかけになった。



「私たちが伝えたい被災地の今」

浜松学院大学の「HAPハマガク」と、お互いの団体の被災地支援活動報告と被災地支援について意見共有をした。報告会では、東北で被害が大きかった箇所についてやその現状、被災者の声などを発表し、東北のことについての情報共有と意見交換を行った。毎年被災地支援活動を行うからこそわかることなどが多く継続的支援の重要性を学ぶことができたと思う。

「外国人の日本の災害に対する対応と理解」

聖隷クリストファー大学の「Global English」と連携し実際に東日本大震災で外国人が「避難」や「高台」といった日本語が分からず避難が遅れた事例を学び、外国人教授から外国人の視点で震災時に必要とされる支援や情報について学び、災害弱者と呼ばれる人たちにどういった支援ができるかについて考えた。

「東日本大震災から学ぶ震災の教訓と備え」

SAST（スポーツサポートとうかい）と連携し、東日本大震災の風化防止、いずれ浜松で起こるとされている南海トラフ巨大地震の関心を目的とし、東北に関するクイズやゲームを通して防災・減災に関する知識を学び、“備える”ことの知識を増やすことを目的に行った。

【アンケート結果】

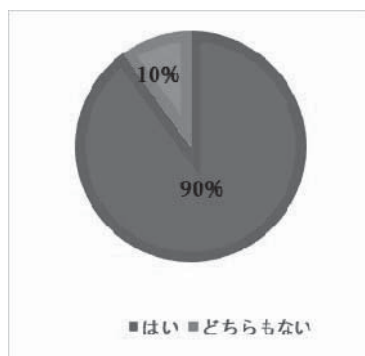


図1：防災・減災意識の高まり

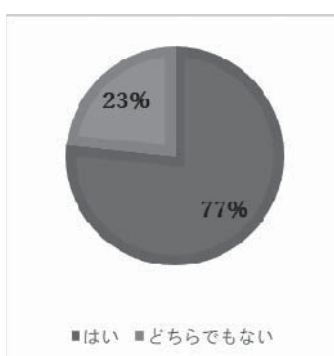


図2：連携の可能性・関係づくり

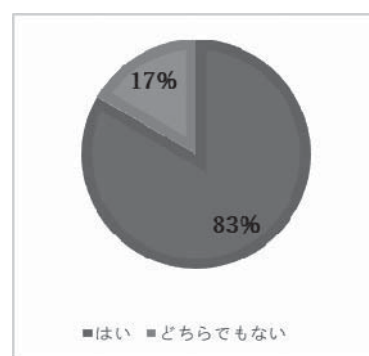


図3：共催イベントの継続性

【考察・今後の展望】

アンケートでは、共催イベントを行ったことで、防災・減災の意識は高まった（図2）ことが明らかとなった。また、今後の連携の可能性や関係づくりでは7割程度にとどまり（図2）、今後の継続性も8割（図3）という結果となった。当初の計画通りの運営ができなかったこと、参加団体が学生に限られたことが影響したと考えられる。

災害時に求められることは「連携・協働」であり、今後もこのようなイベントを行い、今後は“より強い”顔の見える関係作りができるようにしていきたい。そのために今回実現できなかった団体ともイベントを行い、さらに顔の見える関係作り強化していく必要がある。また、学生の枠組みにとらわれることなくNPO団体や市民団体の方もこのイベントを通して関係性を構築し、「災害支援共助システムの構築」（山本・佐藤，2017）へ向けて、継続した活動を展開していきたい。

NPO 法人との協働による浜松市北区伊平地域の活性化プロジェクト

常葉大学 経営学部 地域貢献サークル Cocoa 三年代表 中村一生



<はじめに>

静岡県西部の浜松市北区にある伊平地区は山間部の過疎化が進んでいる地域であり、若者の協力なしでは多種多様な活動を行うことが困難な状況にある。

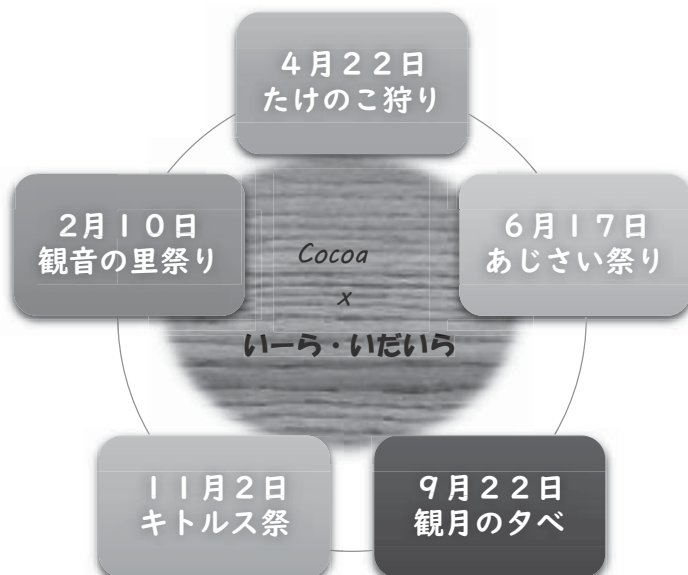


伊平活性化を目的とした活動を行っている NPO 法人いーら・いだいらと地域貢献サークル Cocoa は、奥浜名湖バリューアッププロジェクトを通じてこれまで協力関係を築いてきた。協力関係は本年度で3年目となり、本年度は1年を通じてイベントの企画、運営、観光資源の整備活動を協力して実施していく予定である。

<プロジェクトの目的>

NPO 法人との協力の地域密着型プロジェクトの実施による伊平地域の活性化

<一年間の取り組み内容>



*9月2日に実施予定されていた Cocoa 企画の「BBQ イベント」は、雨天により中止となった。

<結果>

各イベントの会場準備、片付け、実施協力スタッフの実務はもちろん「あじさい祭り」名物トレッキングのコース整備や BBQ 会場造りなど、実際に伊平へ赴きその目で地域の様子を確認しながらの取り組みは具体的な過疎化対策案を生みやすかった。



問題点

今年度初のイベントである「たけのこ狩り」と9月開催の「観月のタベ」の参加者は、それぞれ30名、80名であったが、6月の「あじさい祭り」の参加者は20名ほどでそのほかのイベントよりも少ない人数であった。

原因としては、「あじさい祭り」の中のイベントとしてトレッキングがあり、そのコースのマンネリ化が挙げられる。毎年同じコースを回るため、参加者が固定化されてしまっている。また、新しい参加者が、次の年も引き続き参加してもらえていない状況である。

解決案

「コースのマンネリ化対策として、コースの中の各ポイントにスタンプを設置して、スタンプラリーをしながらトレッキングをしてもらう。」



これは、今後も引き続きイベントを行っていくための学生からの案として、採用され、2月10日に導入された。スタンプは好評であったため、来年度も施行し、参加者の増加や PR を図っていく予定だ。



ブレス浜松×ThunderBirds地域活性化プロジェクト ～クリーン活動で広がる、浜松の生命力！～

常葉大学ボランティアサークルThunderBirds

共催：ブレス浜松、パワー浜松ロータリークラブ 後援：浜松市、浜松市体育協会

【目的】

プロバレーボールチーム「ブレス浜松」と連携して、浜松市内での地域クリーンイベントを実施し、市民との交流を図るとともに地域の活性化に寄与する。



【内容】

〈清掃活動〉

浜松城公園とその周辺ルートを、グループごとに清掃する。

〈アトラクション〉

バレーボールに関するミニゲームや、O×クイズを行いチームごとに競う。



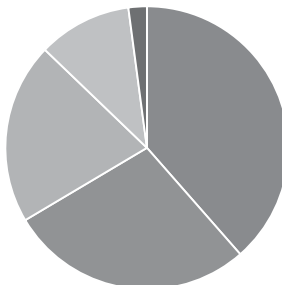
【得られる効果】

- ・ブレス浜松、ロータリークラブ等の各団体が行っている活動を知るきっかけになる。
- ・学生にとって様々な参加者と交流することでボランティア意欲が向上する。



世代間交流が地域活性化のきっかけになる！
さらに、バレーボールやボランティア活動に参加することに興味を抱くきっかけとなる！

【結果(イベントの様子)】



- TB : 38.5%
- ロータリークラブ : 27.9%
- 一般参加者 : 20.7%
- ブレス浜松関係者 : 10.7%
- 中高生ボラ : 2.1%

図1.参加者内訳

参加人数:140名

(アンケート結果より)



清掃活動ではブレス浜松の選手も交え、チーム内で会話をしながら、浜松城公園とその周辺のルートを約40分間ゴミ拾いを行った。45ℓのゴミ袋、約6袋分のゴミを拾うことができた。

チームごとに競い合うミニゲームでは、チーム内だけではなく、参加者全体でお互いを励まし合っていた。さらにO×クイズでは参加者同士で相談し合う様子が見られた。



〈参加者の声〉

- ・思っていたよりもゴミが少なく、浜松城公園が綺麗で感動しました！
- ・ボランティア活動とても楽しかったです。
- ・チームと地域の関わりの機会としてよかった。学生さんの経験を積む機会としても良かったのでは。
- ・いろいろな人と交流ができました。

(アンケート結果より)

今回の活動では、参加者同士が交流を深め、環境美化活動の意識が向上したとともに、地域活性化のきっかけとなったと考える。さらに、浜松市市民協働センターの取り組みとして3名の中高生ボランティアが活動に参加し、ボランティアへの参加の意義や、活動の楽しさを伝えられた良い機会になったと考える。

また、本事業をきっかけに当団体の多くのメンバーが毎年参加する「3.11復光キャンドルナイト」において、ブレス浜松やロータリークラブから協力を得るなど、団体同士の関係作りに前向きに影響した。

参加者からも、ぜひ来年もこのような機会を設けてほしいと意見があったため、今年度以上に清掃活動や交流の時間が充実した内容で、今後も継続的に行っていききたい。



障がい者スポーツを知り、楽しみ、学ぶ 常葉大学 障☆スポSC

サークル紹介

障がい者スポーツボランティアを中心として、いろいろなボランティアに参加している。ボランティアの中で多くの人と触れ合うことにより、多くのことを学び、感じ、知ることによってコミュニケーションはもちろんのこと今学んでいることにつなげていくことが出来る。特にボッチャというパラリンピックの競技にもなっているスポーツのボランティアを多く行っている。



②ショッピングモールでのボッチャ体験会

浜北のキッズイベントへ参加させていただいた。多くのショッピングに来た人たちにボッチャを体験してもらい、ボッチャを知っている人も知らない人も楽しんでいただき知ってもらう良い機会となった。



ボッチャとは

ジャックボール(目標球)と呼ばれる白いボールに赤、青それぞれ6球ずつボールを投げいかに近づけることができるか競うスポーツ。たて10m、横6mのコートで行う。



③浜松市障害者スポーツ大会

9月に行われた浜松市障害者スポーツ大会に参加させていただいた。いろいろな障害の人、健常のひとでの人も楽しむことができる種目が考えられていた。どの種目も工夫一つでどの人でも楽しめるものになるのだと思った。

活動報告

①浜松ボッチャ大会

私たち学生は、会場の準備、主審、副審、タイムキーパー、集球、受付などの手伝いをさせてもらっている。

ボッチャを体験し、障害者の方と試合をやったり、高いレベルの試合も観ることもできる。また、多くの理学、作業療法士の人や障害者の方々と触れ合えるよい機会となっている。



ランプスという機材を使ってボッチャをする

決勝戦を観戦

今後の展望

これからは、自分たちで企画を考えて特別支援学校や小学校などで障害者スポーツを行っていき、多くの人に知ってもらい、楽しんでもらえたらよいと思っている。また、オリンピック、パラリンピックが2020年に東京で行われるためこれからもっと注目される。そのため他のいろいろな種目のボランティアにも参加をし、もっと多くの人と触れ合い、楽しさ、見どころを知り伝えていければよいと思っている。

障がい者、障がい者スポーツにはまだ偏見というものがある。自分たちの活動を通してそれを少しでもなくしていけたら、よいと思っている。

顧問: 櫻井博紀

篠原和也

代表: 保健医療学部

酒井雄飛

都田の子どもと自然を繋げよう！！

加藤亜弥 川島美南海 岸直人 高橋里佳 柳澤陽香
 山田凧紗 山田航星 湯山雄斗 渡邊美南海
 常葉大学 健康プロデュース学部 こども健康学科 中村ゼミ



【プロジェクトの目的】

都田の自然を子どもたちに体験してもらうことで、自然の良さに気づく目や人への思いやりを感じる心などを養うことを目的とする。

今の子どもたちは自然体験が少ないので、都田の自然を通してたくさんの自然を知ってもらいたい。



【これまでの活動】

〈4月〉

ゼミの中で子どもたちと交流の機会を持ちたいという話が出た。みどりの森都田と打ち合わせしたところ、もっと子どもたちに自然体験をさせたいという話を受け、プロジェクトを企画した。

〈6・7月〉

子どもたちの実態を知るために、園見学と交流をした。

〈9.10月〉

最初に企画した内容と子どもたちの実態に少しいずれがあつたため、企画した内容を練り直している。



【実践内容と成果】

～年中～

- ・導入
絵本の読み聞かせ
「みんなで餅つき」
- ・木駒にデザインをする
- ・紐を使って駒を回してみる

木のぬくもりに触れながら、学生や保育者と子どもたちが日本の伝統的な遊びを楽しむことができた。活動の中で準備不足を感じながらも、臨機応変に対応できた。



～年長～

- ・導入
猛獣狩りゲーム
- ・風船を使った羽根つき
- ・ドッジボールなどのゲーム遊び

羽根つきから、伝統文化を通して仲間と体を動かす楽しさを感じることができた。学生も、子どもの思いに寄り添いながら遊びを展開することができた。



南海トラフ巨大地震に活かす 健康サポート支援に関する調査研究

常葉大学ボランティアサークル ThunderBirds (災害支援グループ)

連携: 益城町立広安西小学校、キャンパス熊本、益城町テクノ仮設団地、益城町社会福祉協議会(益城町地域支え合いセンター)
協力団体・組織: 常葉大学社会貢献・ボランティアセンターHUVOC、健康鍼灸学科SinQ

本事業の目的

ボランティアサークルThunderBirdsでは2016年に起こった熊本地震において、「こころとからだの健康サポートプロジェクト」を継続実施してきた。熊本日日新聞の調査(2018)によれば、健康に不安や不満を持つ人は、2017年の調査から3倍に増加し、震災関連死も200名を超えている。

本事業では、熊本での健康サポートプロジェクトを継続実施するとともに、被災者の健康に対するニーズをアンケート及びインタビューにより調査し、来たるべき南海トラフ巨大地震に活かすことのできる、こころとからだの健康サポートのあり方を明らかにすることを目的とする。

第4期 現地支援活動

①SinQブース

利用者数: 86名 (3日間延べ人数)

仮設住宅の住民を対象に、もみほぐしや足湯を行った。(写真1)
施術を行いながら震災当時の様子や健康上の悩みなどを聞いた。



写真1

②TOKOHAMAカフェ

利用者: 102名 (3日間延べ人数)

益城町テクノ仮設団地で3日間、益城町社会福祉協議会で半日、カフェを開設し静岡茶と静岡のお菓子を提供した。住民同士の憩いの場を作ることができた。(写真2)



写真2

③広安西小学校

3日間にわたり、1～3年生の授業サポート、登校の見守り、環境整備を行い、2日目の放課後には1～3年生の希望児童約130名に対しピカピカどろだんご教室を行った。(写真3)



写真3

④社協サロン活動

利用者: 10名

益城町社会福祉協議会との連携・協働で頼で、活動3日目に約30分間のストレッチ指導。カフェを開設し、サロン活動を行った。(写真4)



写真4

健康サポートプロジェクトの結果

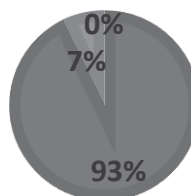


図1: テクノ仮設住宅

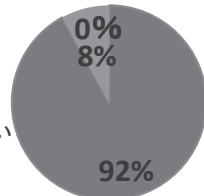


図2: 広安西小学校

大学生によるボランティア(健康サポート)についての回答では、93%がとても良いと回答、仮設住宅に住む被災者にとっても満足 of いくサポートとなった。(図1)

小学校の教員アンケートからは、今後も大学生に健康サポートを行ってほしい(92%)との結果が得られた。(図2) 震災から2年半が経過しても、精神的に不安定な児童やサポートが必要な児童がいることがわかった。また、「子どもたちの気持ちを落ち着ける運動やストレッチなどを一緒にしてほしい」、「子どもとふれあう活動をさらに進めてほしい」など、新たなニーズが得られた。

考察

災害時における大学生による健康サポートは、被災者にとって心身の回復に有効であることが明らかとなった。また、仮設住宅は同じ境遇でできたコミュニティであるため、被災者の心のよりどころになっており、特に高齢者では仮設住宅から復興住宅へ移転することによる新たなコミュニティの形成に不安を感じる声が多く聞かれた。

子どもに対しては、今後も継続した心身のケアが必要である。現在も、仮設住宅で暮らしている児童もあり、住環境の整備やストレスを発散できる場所の設置が必要である。今後、起こりうる南海トラフ巨大地震後の子どものケアに、大学生は遊びを通して継続的に関わることができるのではないかと考える。